# すみれ亭句会　会報　61　（平成二十二年十一月十九日）

## 百花逍遥　倦鳥　選・評

（総評）

佳句である。

ピアノ教室の発表会か。演目に連弾は珍しくないが、父子の連弾とは実に素晴らしい。窓から覗いていた小鳥たちも心愉しく噂しあったにちがいない。

連弾とは文字通り一台のピアノを二人が両手を用いて四つの手で演奏する。ピアノに向かって右手が第一奏者であるが、この句の場合は子供さんであろう。モーツアルトの「トルコ行進曲」は、耳にするとみな思い出す。相好をくづして聴きいるグランドマザー。世の中は晴れて風なし、小鳥はチュンチュン。

**父と子のピアノ連弾小鳥来る**　　マサ改め　まさ

**いつの世も悪女は果敢秋の風**　　しろう

この悪女への応援歌のような作品が温厚なしろうさんの手によることに、一驚するのである。しかも直接的な作句の要因を想像し得ない。

弁証法で言えば、悪女は歴史発展の欠くべからざる要素であった。理由は皆さんで考えていただきたい。”悪女になるなら月夜はおよし　素直になりすぎるから”と往年の中島みゆき。

作者が自信をもって主張する通り、いつの世も悪女は果敢に行動し、なりふりなど構わない。クレオパトラを見よ、中国の某女帝を見よ。

**おだてられ高きに登りラッパ吹く**　　清　龍

これはまた、まるで八方破れのようなこの作品が、篤実な氏によって成ることを知ると、いよいよ俳句の深みにはまるのである。

あらためて「おだてる」と「褒める」のちがいがどこにあるのか考えさせられるが、前者には何らかの「打算、計算」があるのであろう。

九月九日の重陽の日、酒肴を携えて小高い丘などに登る行事がむかし中国にあった。まあ慰安旅行とすれば吹かなくても良いラッパをついつい吹いてしまった悲しさ。しかし、お見通しの上でおだてにのる必要もあると孔子様。

**故郷のじゃが芋うまし友思う**　　慶　子

アンデス原産のナス科の多年草。地下茎が馬の鈴のようになる。連想されるのが転訛したジャガイモ。懐かしい貌がいくつか。「何たったって男爵ヨォ」

**孫生まれ僕に似てると松茸飯**　　河　童

国産ものはめっきり減り、中国、韓国はおろかはるばるモロッコあたりからも。隔世遺伝の恩恵を受けたおめでたい祝膳にのぞむジイジでした。

**紅葉茶屋杖つく友に肩を出し**　　智　昭

紅葉を賞でるために出かけるのは、日本人の楽しみ。テレビの予報もピンポイントで的中。友に肩を貸すのも大きな喜びである。

**カラス二羽点と成り行く秋没日**　　豊　嗣

秋の没日のもたらす夕焼は、真夏のそれに比べるとやや寂しいこともあるが、明るさに目の眩むことも。いまやねぐらに戻る二羽のカラスが点と消えゆく。

**特急列車紅葉映して走り去る**　　和　代

特急列車の窓いっぱいに広がる紅葉。カーブの多い山峡のローカル特急が良かろう。緩行する列車を紅葉狩の人々が見送る。後に残る青い空。

**寺参り日々に深まる秋の声**　　信　貴

「秋の声」は秋の深まるもろもろの気配や音。寺参りであれば心で聞き取る声もあろう。**まして**「女心と秋の空」ひどくきまぐれな天候も。

**時は秋受賞の知らせに背を伸ばし**　　冬　草

永年の地道な活動が報われました。受賞の知らせに全身を伸ばして労わる。

**秋晴に南宋の青磁艶やかに**　　晶　子

青磁釉を施した透明感のある青磁。これは古代中国の空の色か。

**鳥群れて飛び立つ彼方の輝葉かな**　　雅　子

大群は椋鳥であろうか。太陽が翳るほどである。かなたに影の輝葉。

**銀ぶらの肩でひといき赤とんぼ**　　満紀子

赤とんぼは意外と人なつこく、好奇心も強い。銀座はエルメスの赤トンボ。

**時雨忌の名句の海の深さかな**　　西　風

時雨忌は芭蕉忌。早稲の香や分け入る右は有磯海、物理的深さではない。

**ゆるゆると顔を変へゆく秋の雲**　　弓　人

秋の雲は高い。夏の入道雲のような存在感はないがよく変化する。また顔が。

**荒ぶる波台風接近御前崎**　　靖

御前崎のあたりは高い山も建物もない。風はビュウビュウ波はザンブリコ。

**口開けて小富士の火口冬日呑む**　　黄　雀

全国に幾つかある〇〇小富士。大体休火山。一つの冬日を皆呑む不思議。

**街灯を抱き込み映える冬紅葉**　　善　啓

街中の紅葉を詠んだ句は珍しい。夜は街灯で紅葉するのであろうか。

**色褪せて散りゆく紅葉役終えて**　　藤　則

「そうだったのか」紅葉の役割は色づくこと。満期になると散る定め。

## 鳥兜の森　兼題「寒雀」　まさ　選・評

**吹き寄せにもぐりてあそぶ寒雀**　冬草

「吹き寄せ」とは、風が吹いて種々の木の葉が一所に集まること。
誰もいない早朝の庭先、ゆうべの風で落葉がこんもりと吹きたまっている。
早くも起出した、霜を着たような落葉をかきわけて、まるでかくれんぼでもしているように出たり入ったり。
人間さまはまだ眠っているのだろう。寒い冬の朝の一齣。

**あさ朝よ早よう起きよと寒雀**　西風

もう少し朝寝がしたいのに、表ではちゅんちゅんと雀がうるさい。思わず布団を頭から被ってみるのだが、それでも雀は懲りずにチュんチュん鳴き続ける(別段、邪魔をしようと思っているのではないのだが)。
毎朝繰り返される作者と雀との戦い(?)が面白い。

**寒雀皆な機嫌の顔ばかり**　倦鳥

寒気を防ぐために羽毛を丸々と太らせている「ふくら雀」。お米でも撒いてやると人をおそれず近づいてくる。
いつまでも見飽きないのだが、一羽だけではなくみんなつるんで同じ行動。よく見るとひとつとして不機嫌な顔のない楽しさおかしさ。
ほかの句も面白い句ばかりでした。